

みんなでいっぽ

特別支援教育推進委員会

特別支援教育で

ユニバーサルデザインを考えよう

特別支援教育が平成19年に導入されて以降、すべての学校、教員が特別支援教育にかかわることが当たり前になってきました。「ユニバーサルデザイン」の考え方を教育分野に取り入れ、すべての子どもにとって安心して学ぶことができる学習環境及び確かな学びを保障する授業を推進する動きが活発になってきました。

今回は、ユニバーサルデザインの基本的な考え方や通常学級における学習環境や授業でのヒントなど、本誌「みんなでいっぽ」を通して情報発信をしていきたいと思います。

= 1号の内容 =

- 1 教育におけるユニバーサルデザインとは
学校としてユニバーサルデザインの視点から考える
- 2 教室環境のユニバーサルデザイン
- 3 授業のユニバーサルデザイン
具体例①、②
- 4 人的環境のユニバーサルデザイン
- 5 特別支援教育研修講座より
「発達障害のある子の自立に向けた支援」

～今年度の活動について～

今年度も研究テーマを「一人一人の違いを認め、生き生きと活躍できる特別支援教育に関する研究～サポートが必要な子どもたちの理解と具体的な対応について～」として、研修講座の開催（10月実施）と「みんなでいっぽ」のまとめを計画しました。

今年度も、日々の実践場面で活用できる様々な対応例などを通信「みんなでいっぽ」や研究所HP等でみなさんにお届けしたいと思います。

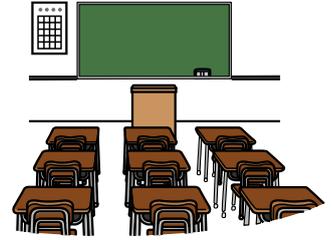
帯広市教育研究所

〒080-8670 帯広市西5条南7丁目1番地

TEL 23-4949 FAX 23-4988

Email kenkyu@f1.octv.ne.jp

1 教育におけるユニバーサルデザインとは

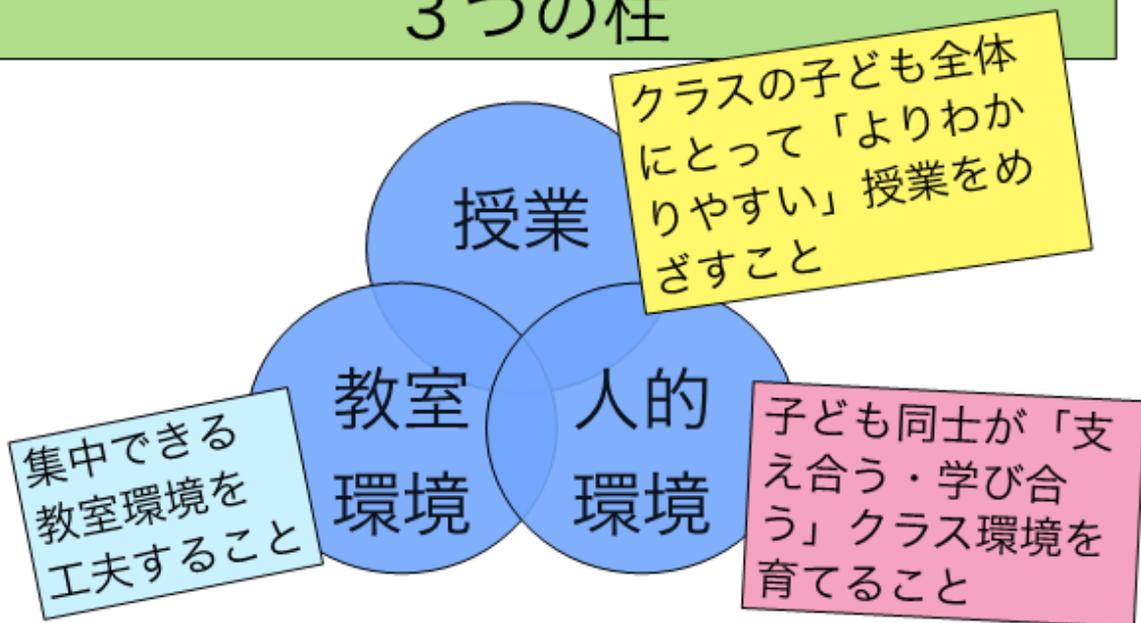


「ユニバーサルデザイン」とは、使う人に必要な情報や使い方が簡単にわかり、効率的に使うことができるなど、より多くの人利用可能であるようなデザインにすることをいいます。平成19年から実施された特別支援教育の取り組みの中で、特別支援教育の視点を踏まえた授業づくりは、支援を必要とする子どもにはもちろん、すべての子どもに対しても、よい結果をもたらすということが言われています。近年では、「教育におけるユニバーサルデザイン」についての研究や実践が盛んに行われるようになってきています。

まず、最初に広まったのが、教室環境のユニバーサルデザインについてです。例えば、「黒板の周りをすっきりさせる」、「棚にはカーテンをして不必要な刺激を少なくする」、「声メーターで、状況に合わせた声の大きさを視覚的に理解する」など、教室環境の工夫が取り上げられました。これによって、集中しやすい学習環境や暗黙のルールについての理解など数多くの実践が広がりました。同時に、授業のユニバーサルデザインについての実践研究が行われるようになってきました。題材や目標を焦点化したわかりやすい授業、視覚化を工夫した子どもを引きつける授業、子ども同士をつなげ、理解の共有化を図る授業など、全員が参加しやすい授業の工夫が行われています。

しかし、教室環境や授業のユニバーサルデザイン化だけでは、うまく行かないという声も多く聞かれます。そこで、それらの実践の基盤となる「人的環境のユニバーサルデザイン」の重要性がクローズアップされてきました。クラスの雰囲気をやわらかくし、学び合うための環境づくりをすることです。これがなければ、教室環境や授業をいくら工夫しても、うまく行かない結果になってしまうことが多いからです。

ユニバーサルデザインアプローチ 3つの柱



学校としてユニバーサルデザインの視点から考える

「校内支援体制の有効化を見直す」「支援の実際」

様々な視点で、課題をもつ児童生徒が増加する現状で、各学校でも校内支援委員会が開かれ、児童生徒の課題解決に向けて取り組んでいることでしょう。そこで、改めて、その校内支援委員会・校内支援体制を有効化させ、学校としてのユニバーサルデザインを構築していきましょう。

校内支援委員会は機能しているだろうか？『見直し』を常に！

① 校長・教頭・担任・各学年団・教務・生徒指導部・・・その都度必要に応じて集合しているだろうか？



② 外部との連携は、密にとれているだろうか？ → 帯広市子育て支援課・帯広市教育委員会（心の相談員・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー）・帯広児童相談所・各医療機関等

③ 校内支援委員会での内容については、その概要や校内支援体制変更等について朝の打ち合わせ等で「情報を共有」できているだろうか？

校内支援委員会で、できる限りの支援を行うことになっていきます。校内支援委員会で検討された支援法が、実際に行ってみてマッチしたかどうか・・・。それを確認し共有していくことの繰り返しになります。すでに、どの学校でも、「一斉の指示が伝わりにくい児童生徒」がいて、支援の着眼点として取り上げられていると思われませんが、改めて、実践例の一つとして、確認しましょう。

支援の実際～一斉の指示で行動が難しい場合～

どうしてなのか？を理解する

◎指示が入らない

- ・全体への指示を自分に対しても向けられていると受け止めていない
- ・周りの音や目についたものが気になり、自分の空想に浸っている

◎指示を忘れてしまう

- ・一つ一つの指示は聞いているが、複数の指示を一度に覚えられない
- ・気が散りやすく、一つのことをやり終えないうちに別のことを始めてしまう

◎やるべきことがわからない

- ・指示を聞いていても、どこからどのようにやれば良いのか手順が理解できず行動に移せない



手立てとヒント

◎自分にも関係していることを理解させるように、そばに行って話し、視線を合わせながら話をする

◎全体での指示のあとに、個別で話を伝える

◎絵カードなどにして視覚に訴える



クラス全体への配慮を見つめなおしましょう

★全体が静かになってから、指示を出す。

★指示の言葉は短く、はっきり出す。一つの行動ができてから、次の指示を出す。指示をした内容を復唱させる。

★活動の手順をボードに箇条書きする、毎日取り組むことが定着するまで手順を示したカードを掲示する。

★周りの行動がモデルになるため、個別の対応にこだわるのではなく、周囲で適切な行動ができた子どもをしっかりと褒めて、意識させるという方法も取り入れましょう。

2 教室環境のユニバーサルデザイン

- ◇ルールのある空間で、みんなが快適に生活するための環境づくり
- ◇暗黙のルールなど、目に見えないものを見えるようにする
- ◇子どもの「いいところ」が発揮されやすい環境づくり



教室環境における支援例



① 机の中の工夫をする

机にシールなどで「ふでいれ・プリント」「教科書・ノート」と表示をつける。



サイズに合ったお道具箱を利用することで、引き出し付きの机になりました。

② 掃除用具入れなどに工夫をする

掃除用具入れや給食配膳台は、活動に取りかかりやすいように整理しておく。

(例) 使う道具に番号をつける
(ほうき①, ほうき②など)

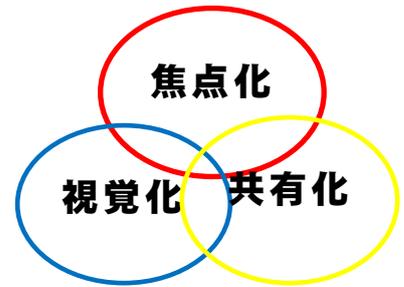
掃除用具の片づけ方や、給食配膳台の上に置く物などを写真や図で説明して掲示する。



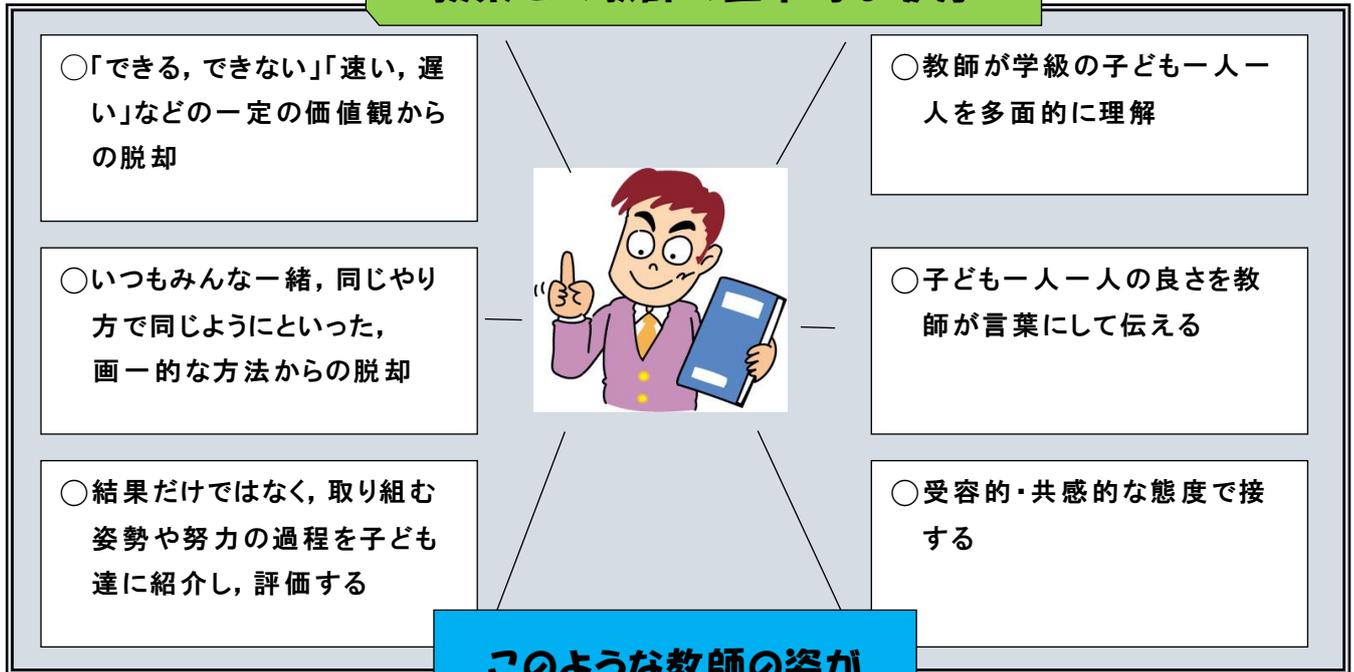
3 授業のユニバーサルデザイン

- ◇視覚化を工夫し、子どもを「ひきつける」授業
- ◇子どもと学びを「結びつける」「つなげる」授業
- ◇焦点化し「方向づける」授業
- ◇理解を「そろえる」授業
- ◇「わかった」「できた」と実感させる授業

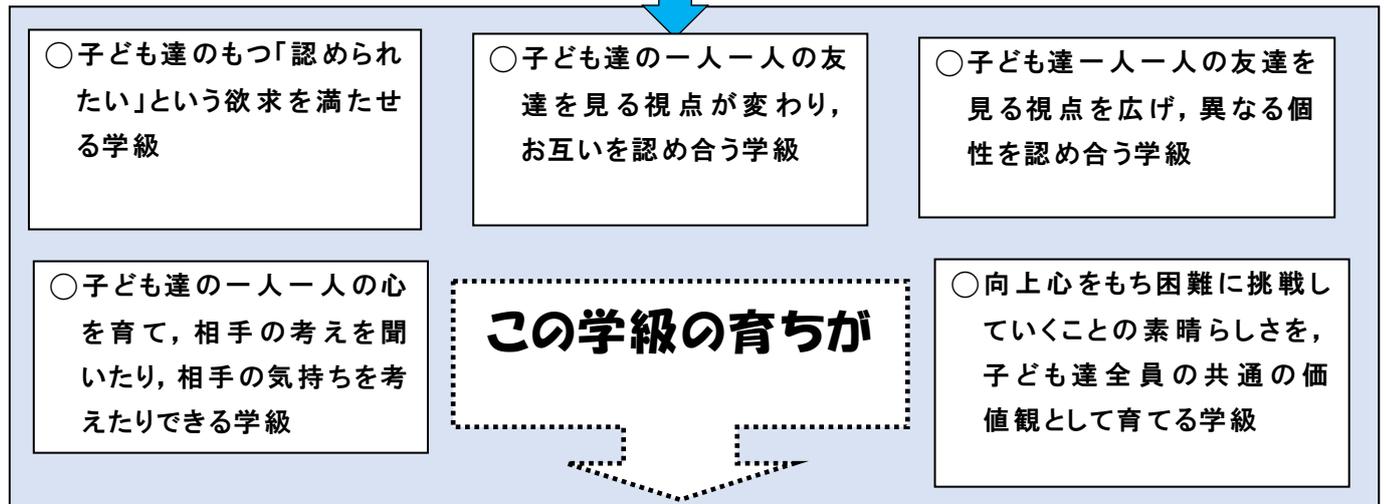
※「焦点化」「視覚化」「共有化」を生かした授業づくり



授業での教師の基本的な姿勢



このような教師の姿が



特別な教育的支援を要する子どもの頑張りを認め, 温かく接する雰囲気

具体例①（小学校算数編）

ユニバーサルデザインを授業に置き替えると「できるだけ多くの子どもにわかる授業」ということになります。どんなに工夫しても、通常学級で一斉授業を進めていく中で授業のペースにうまく乗れない児童がいるのではないのでしょうか？今回は、わり算の指導に使えるワークシートを紹介します。

～わり算指導『商(答え)をたてるのに混乱する子のために』～

○ねらい

- ・補助になる計算をするスペースのある用紙を使うことで、混乱を減らす。
- ・書く場所がはっきりした用紙を使うことで、桁がずれる間違いを減らす。

問題 377 ÷ 58 = 8

377 ÷ 58 の商を見つけるための補助となる計算を右側のスペースに書いています。

- 58 × 6 = 348
- 58 × 4 = 232
- 58 × 3 = 174
- 58 × 5 = 290

計算の過程を残しておくことで、次の位の商を見つけるのに役立つこともあります。



「特別支援教育 はじめのいっぽ! 算数のじかん」(学研)の中の1つの例です。算数の学習で一斉指導を行う中で活用できるアイデアがたくさん載っています。

具体例②（授業づくり編～MI理論～）

MI (マルチプル・インテリジェンス=多重知能)理論とは、人の知能は単一ではなく、8つの分類から成り、人それぞれ知能にも長所や短所があるという考え方です。1時間の授業の中で、一つの知能だけに偏った活動になってしまうと、それを苦手とする児童生徒にとってはなかなか理解に結びつきません。ぜひこの8つの分類を意識し、様々な活動をバランス良く取り入れた「ユニバーサルデザインの授業」を作ってみませんか？

	○…得意なこと	☆…適した学び方
<p>○ 文字や文章を読む・書く 話を聞く・話す</p> <p>☆ 知識や公式を記憶する ワードウォールを活用する</p>	<p>言語的知能</p>	<p>音楽的知能</p> <p>○ 音・抑揚を聞き分ける 相手・場の雰囲気に合わせて リズムを刻む・楽器の演奏をする</p> <p>☆ ゴロ合わせで覚える 自分に合うリズムやスピーチで学ぶ</p>
<p>○ 自分で筋道を立てる・計画する 関連づける・分析する</p> <p>☆ 試行錯誤・実験・証明する 数値化する・仮説を立てる</p>	<p>論理的知能</p>	<p>身体的知能</p> <p>○ 身体を動かす・ものをつくる 新しいことにチャレンジする</p> <p>☆ 体験学習(実験・作業) 反復練習(漢字・運動など)</p>
<p>○ 情報を集める 分類する・整理する</p> <p>☆ フィールドワーク・辞典の活用 表・チャートで整理する</p>	<p>博物学的知能</p>	<p>視覚的知能</p> <p>○ 絵や図で理解・表現する 頭の中で図形を展開する 全体像を捉える</p> <p>☆ 見通しを立てる 図表を使って学ぶ</p>
<p>○ 一つのことを深く考える・感じる 哲学書を読む・原理を学ぶ</p> <p>☆ 自分の言葉や表現方法を探す 一人で静かに作業・思考する</p>	<p>内省的知能</p>	<p>対人的知能</p> <p>○ 人と関係をつくる・グループ活動をする 他者の気持ちや、考えを理解する</p> <p>☆ ペア・グループ学習 質問し合う・討論・発表</p>

引用文献 本田恵子(2014)「脳科学を活かした授業改善のポイントと実践例」, 梧桐書院

4 人的環境のユニバーサルデザイン

- ◇クラスの雰囲気をやわらかくし、学び合うための環境や関係づくり
- ◇間違いを冷やかしたり、失敗を笑ったり、からかったりせず、誰もが「わからない」ことに正直になれる場をつくる
- ◇「みんなちがってみんないい」「応援し合える仲間づくり」の雰囲気をつくる

特別支援教育がスタートしてから、支援が必要な子の理解や具体的対応など、本人に対する支援例は、様々な資料などで取り上げられています。しかし、個別支援やユニバーサルデザインの方法を、ただ真似て導入してもうまくいかないことがあります。特定の子どもへの対応を変えただけでは、クラスをおさめきれないという苦勞も聞きます。そこで、様々な取り組みの基盤となる「人的環境のユニバーサルデザイン」が重要となってきます。クラス全体の社会性を高めることにより、子ども達が支え合い、育ち合う雰囲気づくりが必要です。ここでは、「支援が必要な子を取り巻く“まわりの子”」に注目して考えてみましょう。

「まわりの子」の理解と対応

ケース 1 問題行動を真似する子



〈例えば…〉

- ・立ち歩きが目立つ配慮を要する子の姿を見て、きちんと授業を受けていた子が、真似するようになる。立ち歩く子が、あっという間にどんどん増えてしまうケースもある。
- ・誰かが「くせえ」と言うと、いつまでもしつこく「くせえ」と連呼している。

〈このタイプの子〉

- ・真似する子どもの多くは、「授業がつまらない、わからない」と感じていることが多い。
- ・幼児性が強く、おもしろそうなことに気をとられてしまい、深く考えずに行動してしまう傾向がある。

〈具体的対応例〉

- わかりやすい授業が最大の支援、「わかった」「できた」と思える体験を重ねる。
 - 指示をはっきり、短く伝える。
 - 視覚化の工夫をする。
 - 活動をわかりやすく配列し、飽きさせない。
 - ペア学習などで理解をそろえる。
- 幼児性が強い場合は、「見ているよ!」「がんばっているね!」というサインを送るよう心がける。
 - 「目を合わせてうなずく」「グッドジョブなどのハンドサイン」などのノンバーバルな「ほめ」を継続する。

- 自己決定の力を育み，心のブレーキをもたせる。
→「あなたはどう思うか？」と問い，考えさせる。

NG 「幼稚園からやり直し」「何回言ったらわかるんだ」などは，自尊心を低くすることはあっても，問題行動と直接つながらないので，あまり効果は上がらない。叱るときは，よくないことを具体的に知らせること，望ましい行動をはっきり伝えることが大切。

ケース2 わざと刺激をする子



〈例えば…〉

- ・相手の一番嫌がることをする。相手の興奮しやすいキーワードをよく知っていて，絶妙なタイミングでからかう。
- ・配慮を要する子は，我慢できず興奮してしまう。
- ・担任がその関係に気付いて遠ざけても，すぐに近づき刺激してしまう。

〈このタイプの子〉

- ・勉強はそこそこできるが，授業中に余計なことを言ったり，先生や友達の失敗を追求したりするなど，マイナス方向での頭の回転が良い特徴がある。
- ・善悪の判断が弱く，意外と友達の意見に流されやすい傾向がある。
- ・先生が注意すると「だってぼくだけじゃない」と主張することが多い。

〈具体的対応例〉

- 休み時間に一緒に遊んだり，スポーツを楽しむ。
→不健康な遊びとして「誰かをいじる」ことを選択しているので，健康な遊びのレパートリーを増やしていく。
- 友達と比較する発言を控え，個人内評価，自己評価に目を向けさせるようにする。
→「他の人には勝てないが，こいつにだけは負けたくない」などと支援を要する子と張り合ったり，支援を要する子によく似たタイプであったりすることも多いので，比べるような発言は逆効果である。
- 他者に貢献する喜びを実感させる。
→「ありがとう」「助かったよ」という言葉で，役に立っていることを実感できるようにする。

ケース3 影でコントロールする子



〈例えば…〉

- ・興奮しやすい子をねらって刺激する。その子が興奮してパニックになった後，サッとその場から立ち去る。先生が来たときは，その子だけ一人で騒いでいるかのような状況が作り出される。
- ・自分が興奮させておいて，そのパニックになっている子を先生の前でなくさめたり，か

ばうような発言をするといった巧妙な場合もある。

- ・ からかい、爆発させるまでの過程を楽しみ、それに成功すると、気持ちが冷めてしまうことが多い。

〈このタイプの子〉

- ・ 勉強ができる子だったり、少年団などで活躍していたりする場合がある。頭はいいけど、心が育っていないような子。
- ・ 「わざと刺激する子」と違って、いつまでもトラブルに便乗せず、パッと引く。かなりクールなところがある。
- ・ 子ども達の中では仲間に威圧感を与えているが、大人と子どもの前で巧妙に態度を変えることができる。
- ・ 担任の先生であっても彼らの存在をキャッチすることは難しいことがある。

〈具体的対応例〉

- プライドの高い子の「大人ごころ」に働きかける。

→ みんなの前でつるし上げ的に叱られることが大嫌いで、プライドの高いタイプの場合が多い。大人として扱うことや一人前として関わるのが効果的な場合が多い。褒めるときも、「えらいね」「すごいね」ではなく、ことわざを使って知的に褒めたり、具体的事例を取り上げたりして伝えることが効果的なことがある。

- 1対1になる場面を見つけ、さりげなく、じっくり話を聞いてあげる。

→ 子どもでありながら、勉強やスポーツで多忙である場合や、親の前ではかっこつけなければならない状況があったりして、日常生活でストレスをため込んでいる場合もある。

ケース4 トラブルを期待するまわりの子



〈例えば…〉

- ・ 自分たちは直接手を下さないが、「今日も何か起きないかな」と“事件”を楽しみにしているギャラリー的なグループ。
- ・ 自分で何か仕掛けるわけではないが、「問題行動を真似する子」に同調したり、「わざと刺激する子」をはやし立てたりする。配慮を要する子に対して、挑発する様子を楽しんだり、授業が中断した隙に便乗して勝手なことをして楽しんだりしている。

〈このタイプの子〉

- ・ クラスのトラブルを鑑賞して楽しむギャラリータイプ。「問題行動を真似する子」や「わざと刺激する子」に先生がどのような指導をするか観察して、動きを決めていることが多い。また、建設的な意見には乗らないのに、批判的な意見にはいつも同調したり、先生と1対1のときはとても大人しいのに、仲間がいると強く出たりするケースもよく見られる。

このタイプの子に話を聞いてみると…

- ・ 何でオレばかりに聞くの。みんなやってるし。
- ・ ○○を見てると、イライラするんだよ。

- ・○○ばかり，ひいきしているから…。
- ・悪いことはわかっているけど，それを指摘したら，今度は自分がいじめられるかも。
- ・誰かがつらい目に遭っているのを見て，すーっとすることがあるような気がする。

予想される内面

もっと自分を見てほしい。もっと褒めてほしいし，認めてほしい。

〈具体的対応例〉

- 「ぼくだって認めてほしい」「大切にされたい」という思いに応える場面を意図的に設定する。

例) 運動神経のいい子→体育の時間のお手本になってもらう

例) 図工の得意な子→教室の飾りなどを手伝ってもらう

→「いいところ」を認めてあげる場面を積極的につくる

- まじめに，普通にやっている子にも目を向ける。

→当たり前なことでも，しっかりやっている子を認めるようにする。

- 言葉に敏感になり，やわらかい関わりができるようにクラスの雰囲気をつくる。

×「うざい」「きもい」「死ぬ」

◎「どんまい」「ありがとう」「いっしょにやろう」

- 個別の支援は，さりげなく，そっとサポートする。

ユニバーサルデザイン アプローチの基盤

- ・支援が必要な子のサポートだけを考えてもうまくいかないことが多い。(特に支援学級担任、専門家はここにはまりやすい)
- ・すべての子にとって支援は必要であり、「**まちがえを許し合える**」「**ちがいを認め合える**」学級づくりが基盤。
- ・この基盤がなければ、あらゆる個別支援・ユニバーサルデザインの方法は効果が発揮されづらい。



参考文献

阿部利彦 (2014) 「通常学級のユニバーサルデザイン プラン Zero」, 東洋館出版社

5 特別支援教育研修講座より

「発達障害のある子の自立に向けた支援」～就労相談の現場から～

講師 石狩市相談支援センターぷろっぷセンター長 大澤 隆則氏

10月20日（火）、今年度の特別支援教育研修講座を、とかちプラザにて開催しました。今回は、石狩市相談支援センターぷろっぷセンター長、大澤隆則氏をお招きし、就労に向け、小中学校でどういった支援が必要か、また、就労に至るまでのサポート体制など、事例をもとに支援の実際を紹介していただきました。

「就労」からトップダウンさせて考えてください

小学校

・ 基礎的なお手伝い・障害理解

中学校

・ 横の人間関係・二次障害の可能性

高校

・ 具体的な進路・縦の人間関係



相談って・・・

<「行動の根拠をつくる」のが相談>

- ・ 親子関係から友達そして先輩に広がる。親以外で本人の話を聞いてくれて先生以外に教えてくれる大人の存在が大切。

<相談方法を、子ども達は教えられているか？>

- ・ 親、先生以外で「そうだね、やってごらん（やらないほうがいい）」って言ってくれる人はいるだろうか？

<就職するまでの流れ>

- ・ 小・中学校を卒業後は、普通高校・専門学校・各種高校・特別支援高校単地校・特別支援学校高等部のどれかになる。（基本的に中学校卒業で福祉サービスを受けることはできないが、北海道の児童相談所の許可を受けられれば、中学卒業後から福祉サービスを受けられる。）高校修了後は、技術系学校・専門学校・カレッジ・障がい者雇用・福祉サービス・就労（就労A・就労B）
- ・ 作業習得，目標達成が早い。作業内容と就職イメージがつながりにくい。本人による自己評価が高い。本来の就業課題に対応しづらい。→このような状況をかんがみて「特性に合った魅力ある活動を創出」することが大切である。

活動内容の設定

＜活動を通じたアセスメント＞

- ・フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメント
- ・就労移行支援のためのチェックリスト「GATB」
- ・「ワークサンプル幕張版（MWS）」「TTAP」

＜多様な作業プログラム＞

- ・得意、苦手を知り、自分に合った職域を絞っていく。
- ・役割分担も仕事。手順や要求水準を明確化し、達成度を把握できるようにする。
- ・アセスメントに基づき、個別に課題設定をする。



参加者の声

- ・就労を見据えた日々の指導の大切さを改めて感じました。小学校の現場では、青年期の姿をイメージしていくことで指導のあり方や見直しが必要となってくる。保護者にも将来像を具体的にイメージできるように支援していきたいと考えます。
- ・特別支援の児童生徒が働くというところに意識をおいて日々を過ごすことは正直あまり多くなかったと感じました。どうしても目の前の問題を改善しようとし、その先に社会的に周りの人と一般的な関係を保てるようにと考えて指導はしていますが、具体的に「では就職の際にどうやって行うのが正しいのか」「就職の形にもいろいろある」というところまでは考えが及びませんでした。今回の講演を聞いて教育の先のことを考えることができました。
- ・小学校の支援学級担任という中で中・高・支援学校への進学について考え話を聞く機会はありませんでしたが、今回のように就労について深く掘り下げた話を聞く機会は少なかつたため大変参考になりました。自らも民間企業で勤め障害をもつ方と働いた経験がありますが、まだまだ偏見の目や採用の少なさなど問題点があると感じてきました。学校・企業など、まず理解して環境を作り、ジョブマッチングの配慮やフォローなど安心して将来のことを考え働き続けられる世の中になるよう、学校現場も日々学び、つながりを作っていくことが必要だと感じました。
- ・知らない言葉がたくさん出てきて勉強不足だと感じました。就労のことは、高校にお任せというような感じがありましたが、中学生のうちにはやるべきこと、やれることがたくさんあると思いました。今担任している生徒にも通ずるお話がたくさんあり、指導の参考にしたいです。事例があり、とてもわかりやすい内容でした。